

白い柔肌が、汗に滲んでいる。

薄暗い部屋の中で、力の抜けた白い曲線が、僕の上でくったりとしていた。なめらかな肢体の重さが、愛しい。彼女の体は冷たかったが、火照った体には心地よかった。

「ねえ。」

脚線をくねらせながら、彼女が言葉を紡ぐ。

「行きずりの恋だと、人は笑うかしら。」

いかにも気だるそうに、目を閉じたまま彼女は言う。荒っぽい吐息に入り混じって、自嘲しているふうな笑いが聞いて取れた。

「出会って間もないのに、求め合って。」

唇が無邪気に笑みを浮かべている。悪戯に成功した子供の笑顔だ、と僕は漠然と思った。僕は背中に力を込めて少し上体を起こし、その笑みに口付ける。

彼女の腹部から伝う汗が、体にしたたった。不意に羞恥心が頭をもたげ、僕は目の前の女性から顔をそらした。視線は、不意に外の光景に奪われた。

ああ、外は暑そうだ。無機質な四角い窓は、春の終わりを無遠慮に押し付けてきていた。とうに散った桜が、初夏の日差しにその新緑をきらめかせている。その葉が風に流されている様が、さあつという音を耳に呼び起こした。

そよ風になびく草花と、自分の姿とが意識の中で重なる。

僕は、周囲と同じ服を着せられ、常に与えられた義務を果たしてきた。草花は、風が吹けば周囲と同じになびき、季節に応じてその色を変えてきた。僕と草花は同じだ。僕にとっての義務は、草花から見た風だ。

僕は視線を元に戻した。彼女の双眸が、怪訝そうにこちらを覗き込んでいる。

「葉っぱを、自分に重ねて見ていたんだ。」と、それから僕は、抑揚を抑えて言った。

「ミギナラエの世界だ。面倒くさい義務を、ただひたすら繰り返している。」

詩人なのね、と彼女は微笑んだ。そして一瞬眼を伏せてから再度僕の眼を見つめ、「だけど、義務があるほうが楽なこともあるわ。」

と声を漏らした。自由が耐えがたいこともある、と消え入りそうな声で続ける。

彼女がひとつ息を呑む。次に体を傾けたかと思うと、僕の頬に優しく唇を当てた。

「そういう女がいたという話を、聞いてもらえるかしら。」

雪のような肢体を倒した女性の声が、耳元でそう言った。僕が彼女の体に触れるように頷くと、その人は次のように語った。

私は、広大な自然に囲まれていた。森の緑、動物のにおい、空の広がり、私の原風景だった。きれいな小石を見つけたり、遠くの野原にキノコ型の大木を見つけたり、私は私の宝物を探すことに夢中になっていた。

今でもそのころの記憶は鮮明だ。きっと誰もがそうであるように、私も故郷の風景を鮮やかに思い浮かべることが出来る。

しかしその光景を思い描くことは出来ても、その光景に伴っていたはずの音やにおいを思い出すことはできなかった。一番古い記憶の音を思い出そうとすると、まったく別の記憶に切り替わってしまう。

ガタガタという音と、細かなゆれがよみがえってくる。狭く暗い世界が、私の周りに広がっている。これが、私の最初の音の記憶だった。

私はその中で、きょうだいを——弟と妹とを元気付けていた。母が私たちを産み捨ててしまったことを伏せながら、これからはお姉ちゃんが守ってあげるから、と。さも不安そうな顔をするふたりを、私はそっと抱き寄せたり、頭をなでてやったりもした。

姉弟が寝たり起きたりを繰り返して、どれほどの時間が経ったのかは分からない。私たちは乗っていたトラックから降ろされ、並んだままひとつの部屋に案内された。

その部屋は、私の原風景の対極にあるような空間だった。

壁の鉛色、人工物のおい、天井の低さが私を圧迫する。入ってきたはずの扉はなぜか見当たらず、窓もなく、代わりにいかにも重そうな鉄扉がひとつあるのみだった。

弟たちは私以上に嫌悪感を示していた。部屋の中には同類と思われる連中がたむろしていたが、どこか生氣のない表情をしている者ばかりで、話しかける気にはなれなかった。

そんな環境に放り投げられて、私の中には、強い義務感が生まれていた。

このふたりの幼子を守ろう。

この狭い場所で、ふたりを守ることを、私は私の義務としよう。

そんな思いを強く胸に抱いて、私はふたりの傍を離れなかった。寒いといえば抱きしめてやり、寂しいといえば抱きしめてやった。眠るときは私を真ん中にして寄り添い、手を握って眼を閉じる。両の手に伝わってくるぬくもりが、私を眠りにいざなったものだった。

いつか、みんなで青空の下に帰ろう。

うとうととしながら、そんな思いを抱いていたときのことだ。

きい、と乾いた音がしたかと思うと、鉄扉が開いた。

「おねえちゃん、わたし、おそとにでたい。」

しい、と妹の言葉を制し、私は外から入り込んできているらしい明かりに見入った。

誰かが明かりに向かって進んでいる——と、次の瞬間、その姿はなくなった。扉は何事もなかったかのようにその口を頑強に閉じている。恐る恐る押してみたが、開く気配がなかった。引いても同様だった。

その部屋でどれほどの時間が過ぎたのかは分からないが、その出来事は何度も何度もあった。腑に落ちなかったのは、出て行った者のうち、戻ってくる者がなかったことだった。

そして、あの夜が来た。

「おねえちゃん、おそとにでたいよう。」

泣き入りそうな声で、妹が私に嘆願してきた。かれこれ何回目のお願いだっただろう。外の空気を吸わせてやりたい気持ちは強かった。しかし、ふたりの安全に確信がもてないうちは、安易に動くわけには行かなかった。

鉄扉が乾いた音を立てたのは、私が逡巡している最中のことだ。

刹那の出来事だった。妹は弾かれたゴムのように立ち上がり、弟の手を引いたかと思うと、そのままふたりはドアの向こう側に吸い込まれていった。

「ああ、もうあの子らは帰ってこないよ。」

一瞬の出来事に茫然自失とする私に、誰かの声が冷水のように浴びせられた。

「ここはそういう決まりなんだ。ときたま誰かに求められて、あのドアが開く。それに応じて誰かが出て行く。そしてそれつきりさ。」

「外は、どうなっているの。」

振り返りもせずに質問をこぼした私に、答える声はなかった。静けさが回答だった。

その夜、そのわずかの間に、私の義務は失われた。義務がない状態を自由だというのなら、私はまさしく自由であった。守ろうとしたものはいなくなった。

暗い部屋で自由を突きつけられたまま、私は沈黙と対面し続けた。

弟たちがいたことで、自分がどれほど救われていたのかが実感させられた。誰かの心配をしているうちは、私は強くいられたのだということを感じた。

この部屋の住民が、私と同じように孤独を感じていることを、理解はしていた。しかし彼らと話す気にもなれず、私はただ目の前にある時間を食いつぶしていた。

限界は、想像していたよりも早足で近づいていた。

次に扉が開いたら、私も行こう。

思考を止めた、まさにその時だった。

きい、という音。冷えた体。暖かい風。心は焦燥に駆られた。

さっ、と立ち、走る。冷めた空気が後ろに流れる。頬にぬくもりが当たる。

扉の向こうに、私は出た。

「外にいたのは、あなただった。」

そこで彼女は、大きく息を吐いた。

周囲は雑多な声に包まれていたが、彼女の声は鮮明に耳に入る。

「意外だったけれど、周りを見て分かった。帰る者がいない理由が。」

彼女が言葉を紡ぎ終わると、ふたりの間に沈黙が響いた。

電灯がちかちかと光っている。

僕は彼女の話を反芻しながら、奇妙な皮肉を感じていた。

僕は人に義務を強制され、そこから抜け出して彼女と出会った。彼女は自分に義務を課

し、それを失って僕と出会った。僕は希望を持っていて、彼女は絶望に苛まれていた。

相反する立場であるはずの両者が、出会ったその時に求め合ったのはなぜだろう。

僕たちにはシンパシーがあったからだ。お互いに不安定で、心の空隙を埋める何かを求めていた。

「出会えてよかった。」

沈黙を破ったのは彼女だった。その瞳のふちが、涙で歪んでいる。

「もう離れ離れになるけれど、あなたに出会えてよかった。」

急に僕の体が、大きな力で動かされた。上に乗ったままの彼女の肢体が揺れる。

「僕も」

出会えてよかった。そう言葉を紡ごうとしたが、それは別の大きな音にさえぎられた。

「お待たせしました、ソフトクリームになります。」

彼女に乗せた僕の体を、小さな女の子の手が握り締めた。

ああ君よ、笑いたもうな。

コーンとソフトクリームの、一夏の恋を。